

### 「安心を買う」文化で 農業振興を目指したい

本を通して海外のさまざまな課題に触れ、「自分も何かしなければ」との思いを抱いて大学で開発を学んだ本村美紀さん。JICAで農業分野の支援に出会い、現在はアフリカの農業振興に力を入れている。

#### 「何かしなければ」の思い JICAへの憧れに

私が国際協力に関心を持ったきっかけは、中学生のころにユニセフ親善大使の黒柳徹子さんが書いた本を読んだことでした。黒柳さん自身の経験や対話に基づいた話はもちろん、衝撃的な写真を見て、世界ではこのようなことが起きているのだとショックを受け、自分も何かしなければ、と思うようになったのです。

その気持ちを抱いたまま、高校では自由研究でユニセフについて調べました。また双子の姉と共に、カンボジアなどの地雷問題も調べました。

大学では、国際協力をより深く学ぶために開発経済学のゼミに入りました。そこで知ったのは、いくら開発について数字で議論しても、それは時として机上の空論となる恐れがあり、現場を見ることが大切だという点です。ゼミではインドネシアのコメ流通について調査しましたが、実際に現地を訪問し、農家や政府関係者にインタビューする中で開発途上国における経済的課題の多面性を実感しました。途上国での農産物流通という「農家は作物を安く買い叩かれて、流通業者が搾取している」といわれますが、私が出会った農家の一人は、「契約栽培で安定的に買い取ってもらうことで収入



JICA 農村開発部  
農業・農村開発第二グループ

**本村 美紀**

MOTOMURA Miki

大学で開発経済学を学んだ後、JICAに入籍。沖縄開発センター、アフリカ部を経て、エチオピア事務所で農業関連のプロジェクトを手掛け、帰国後は農村開発部で引き続きエチオピアの農業保険案件を手掛ける。

が増え、トラクターなどの農業投入財へのアクセスも向上して、生活が良くなった」と話してくれました。この調査を通じて、JICAの名前をよく耳にしたことや、文献を当たるとJICAが作成した資料が多かったことから、自分もJICAで働きたいと考えるようになりました。

#### アフリカのエネルギーに刺激 農家と寄り添い生計向上を目指す

大学卒業後、憧れのJICAに入った私は、OJTでガーナとシエラレオネに派遣されました。初めてのアフリカは活気があり、満ち溢れるエネルギーに大きな刺激を受けました。その後、沖縄国際センター、アフリカ部を経てエチオピア事務所へ。現地では関係者と話し合うだけではなく、2週間に1回程度、現場を訪問して農業の現状や課題を理解するよう心掛けました。

エチオピア事務所で携わった案件の一つに、干ばつなど外部からの影響に対するレジリエンス（対応能力）の強化を目指すプロジェクトがありました。エチオピアでは2013年に災害リスク管理政策が策定され、「災害への緊急的な対応」から「災害リスクの管理」への転換を目標として打ち出していました。JICAはその手段の一つとして、「天候インデ



家族同然に親しくなったエチオピアの農家の人たちと。お祭りやお祝いのときは、いつも自宅に招いてくれたという

ックス保険」の開発・導入を行いました。天候インデックス保険に加入することで、災害時に一定程度の保険金が支払われるため、これまで干ばつや少雨による不作の可能性を不安に感じていた農家の不安が軽減され、営農活動に変化や積極性が見られるようになりました。

今の部署に移ってからも、このプロジェクトを継続して担当しています。エチオピアには高い農業ポテンシャルがある一方で、コメ、麦など穀物の輸入も多いのが現状です。労働人口の7割以上が農業に携わっており、農業分野の振興は同国経済にとって欠かせません。エチオピア、ひいては世界中の農家が安心して農業に取り組むことができる制度の確立に、私も全力で取り組んでいきたいと思っています。



エチオピアで、現地の農家の人にインタビューする本村さん(左から4人目)。現場を見ることの大切さを胸に刻んで、仕事に取り組んでいる